

## ガノ交替の成立条件

### — 「補文標識 C のタイプ」という観点から —

國谷 光

#### 【キーワード】

ガノ交替、ノ格主語、補文標識 C、c 統御、名詞性

#### 【要旨】

本稿は、日本語におけるガノ交替現象が成立する条件を、生成文法に用いられる補文標識 C (Complementizer) のタイプという観点から新たに提案したものである。まず、ガノ交替が生じる文法環境について問題を提起し、Hiraiwa(2001, 2005)の理論に従った場合に、名詞的な要素を修飾している際のガノ交替について説明ができないということに触れた。次に、ガノ交替の先行研究について、「名詞主要部の存在を前提としている研究」と「名詞主要部の存在を前提としていない研究」に分けて概観し、問題点を指摘した。それを踏まえて、補文標識 C を C[+end]・C[-end, +T]・C[-end, -T]に分類し、ガノ交替は C[-end]が対象の名詞句を c 統御する場合に成立すると仮定した。そして、C[-end, -T]の場合についてのみ制約を設け、結果として、本稿の仮説によってガノ交替が成立する条件を正しく導くことができた。

#### 1. 問題提起

日本語の節には、以下のように主語のガ格をノ格に交替できるものが存在する。<sup>1</sup>

(1) 僕 {が/の} 読んだ本

(Harada 1971:26(1)、一部改変、原文英字)

(2) 田中さん {が/の} 買った指輪

(日本語記述文法研究会 2008:81、一部改変)

本稿では、このようなガ格・ノ格が交替する現象を「ガノ交替」と呼称し、ノ格を取

---

<sup>1</sup> 参考文献を記していないものは、筆者の作例である(4 節以降で構造を記述している部分は除く)。

っている主語を「ノ格主語」と呼ぶ。Harada(1971)以来、この現象は基本的に述語が名詞を修飾している場合に生じると考えられている。一方で、名詞ではなく助詞が接続している節においてもガノ交替が生じる場合がある。

(3) ジョンは[雨 {が/の} 止むまで]オフィスにいた。

(Hiraiwa 2001:77(23)、原文英字)

(4) [僕 {が/の} 思うに]ジョンはメアリーが好きに違いない。

(Hiraiwa 2001:77-78(24)、原文英字)

Hiraiwa(2001, 2005)は、ガノ交替現象が述語の連体形によって引き起こされていると指摘した。そして、従属節の述語に続いている要素(以下、「従属要素」と呼称する)は実際には名詞的性質を持たず、むしろ連体形の述語部分を含む節の方が名詞的性質を持っていることを示した。

しかし、(1-2)の例において「本」「指輪」を除いた部分は名詞性を持っていない。

(5) a. {その/\*それ} 本

b. {その/\*それ} 指輪

つまり、Hiraiwa(2001, 2005)の分析に従うと、名詞的な要素を修飾している場合のガノ交替について説明が困難になってしまう。この矛盾を解決するために、ガノ交替が成立する条件をより一貫して説明できる新たな道具立てが必要である。

## 2. 先行研究

本節では、ガノ交替に関する先行研究とその問題点について、「名詞主要部の存在を前提としている研究」と「名詞主要部の存在を前提としていない研究」に分けて述べる。

まず、「名詞主要部の存在を前提としている研究」について述べる。Harada(1971)や日本語記述文法研究会(2008)、山橋(2002)はガノ交替が名詞句に含まれる文に生じうるとした。Miyagawa(1993)は埋め込み文を含む名詞節 NP (Noun Phrase)の外側に決定詞句 DP (Determiner Phrase)の存在を仮定することで、ガノ交替の説明を試みた。大島(2010)も、ガノ交替が生じる文法環境について節が従属節であることを重視しつつも、やはり名詞性の headが必要であるとしている。

しかしながら、ガノ交替が生じる節が全て名詞修飾節であるかということ、実際にはそうとは限らない。例えば、以下のような例は名詞修飾節であるとは考えにくい。

(6) [僕 {が/の} 思うに]ジョンはメアリーが好きに違いない。

(Hiraiwa 2001:77-78(24)、一部改変、原文英字)

(7) ジョンは[時 {が/の} 経つとともに]メアリーのことを忘れていった。

(Hiraiwa 2001:78(27)、一部改変、原文英字)

これらの例の従属要素「に」「とともに」は連用修飾節を作っていて、従属節部分が主節に掛かっている。そして、これらの要素に名詞性を求めるのは厳しいと考えられる。

次に、「名詞主要部の存在を前提としていない研究」について述べる。Watanabe(1996)は比較削除構文においてガノ交替が成立することを指摘し、ガノ交替には外在的な名詞は関係なく、Wh 移動という統語操作が関わっていることを論じた。一方、Hiraiwa(2001, 2005)は Wh 移動が無関係であると考えられる例を挙げ、述語が連体形になっていることがガノ交替の要因であるとした。これらの分析は、名詞的主要部が表面上存在しなくてもガノ交替が生じうることを説明できる点で重要であるが、Watanabe(1996)ではガノ交替の適用範囲が広がりすぎてしまい、Hiraiwa(2001, 2005)では1節で述べたような問題が生じてしまう。さらに、以下のような例においてなぜガノ交替が妨げられるのかを説明できない。

(8) a. [雪 {が/\*の} 降った]にしては、外が暖かすぎる。

b. [太郎 {が/\*の} 行く]なり、[次郎 {が/\*の} 行く]なり、好きにしてくれ。

「雪 {が/\*の} 降った」「太郎 {が/\*の} 行く」「次郎 {が/\*の} 行く」の部分は「その」に置き換えられない一方、「それ」に置き換えられる。

(9) a. {それ/\*その} にしては、外が暖かすぎる。

b. {それ/\*その} なり、{あれ/\*あの} なり、好きにしてくれ。

つまり、Hiraiwa(2001, 2005)に従えばガノ交替が成立するはずである。しかし、ガノ交替が起こらない。このように、Hiraiwa(2001, 2005)の理論では、上記のような例におけるノ格主語の非文法性が説明できない。

### 3. 本稿の仮説

本節では、先行研究の問題点を踏まえて、新たに仮説を提示する。

まず、補文標識 C には名詞修飾節タイプの C[-end, +T]・非名詞修飾節タイプの C[-end, -T]・主節タイプの C[+end]という3種類のタイプがあるとする。これらは、次のような定義に基づいて決定されるとする。なお、「T」は「連体」が由来である。

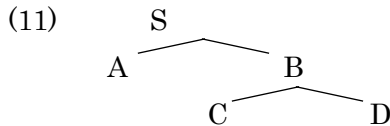
(10) 「Cのタイプ」の定義

a. X[+N]が C を c 統御しているとき、その C は[-end, +T]である。

b. X[-N]が C を c 統御しているとき、その C は[-end, -T]である。

c. Cをc統御するようなXが存在しないとき、そのCは[+end]である。

「c統御」とは句構造同士における関係の一種で、Reinhart(1976)で定義された概念である。以下、節点とc統御について樹形図を用いて説明する。なお、節点とは、以下のような樹形図においてA~D、Sのように枝で結ばれている点のことを意味する。



節点Aは、節点Sに直接支配されている。そして、節点Sは節点AとBを支配している。このとき、AはBをc統御していることになり、同時にCとDもc統御していることになる。本稿では、このc統御を分析に用いる。

そして、[±N]については以下のような条件により決定されるものとする。

(12) [±N]の定義

以下のどちらかを満たしているものは[+N]であるとし、どちらも満たさないものについては[-N]であるとする。

- a. 自立語で、活用が無く、助詞を付加して主語になることができるもの  
(修飾語を含んでも可)
- b. 形容動詞に後続した際、「な」のみが介在し「である」「であった」が介在しないもの

本稿では基本的に(12a)の条件のみについて判断し、(12a)の条件に該当しない場合についてのみ(12b)の条件を確認する。この(12b)について、形容動詞が従属要素に付属する場合、大きく分けて形容動詞の語尾部分が「な」になる場合と「である」「であった」になる場合がある。本稿は、形容動詞の語尾として「な」のみを取るものを本来の名詞修飾であると考え。名詞性の定義について、従来の名詞の分類とずれが生じている部分があるかもしれないが、本稿ではこのように考えるものとする。

次に、C[-end]とC[+end]について説明する。C[-end]は「文が終了しないこと」の予告、C[+end]は「文が終了すること」の予告を意味する。例えば、(13a)の下線部は文が終了していないためC[-end]ということになり、(13b)の下線部は文が終了しているためC[+end]ということになる。

- (13) a. 太郎が歩いた道を次郎がたどった。
- b. 太郎が歩いた。

これらを踏まえて、ガノ交替は以下のような条件において成立すると考える。

(14) ガノ交替の成立条件

C[-end]がノ格主語を c 統御している。

(15) ガノ交替の成立における制約

C[-end, -T]がノ格主語を c 統御していても、条件節のように「従属節であることが前提となっている」場合にはガノ交替が成立しない。

本稿では、ガノ交替におけるノ格主語が時制節 TP(Tense Phrase)内に存在すると考えている。そして、C[-end, +T]もしくは C[-end, -T]がノ格主語を c 統御することがガノ交替の成立条件であるとする。ただし、C[-end, +T]ではなく C[-end, -T]がノ格主語を c 統御している場合には、(15)のような意味的な制約があるとする。「従属節であることが前提となっている」節は、例えば日本語記述文法研究会(2008)における「条件節」「原因・理由節」などが該当する。このような節では、「文が終了しないこと」が前提となっているため、それを予告する必要がない。よって、統語上の条件が整っていたとしても、意味上の制約によってガノ交替が妨げられると考える。

## 4. 分析

本節では、様々な文法環境におけるガノ交替の成立が、前節で定めた仮説によって説明できることを示す。

### 4-1 C[-end, +T]の場合

まず、ガノ交替が成立する場合について、C のタイプが[-end, +T]の場合を説明する。以下に、(1-2)の例を再掲する。

(16) 僕 {が/の} 読んだ本

(Harada 1971:26(1)、一部改変、原文英字)

(17) 田中さん {が/の} 買った指輪

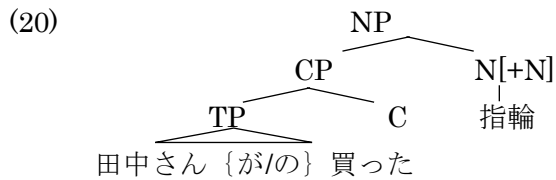
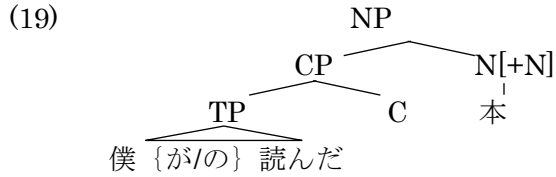
(日本語記述文法研究会 2008:81、一部改変)

上記の例における「本」「指輪」は自立語で活用が無く、以下のように助詞を付加して主語になることができる。

(18) a. 本が欲しい。

b. 机の上に指輪がある。

そのため、「本」「指輪」は共に[+N]である。このとき、[+N]である要素の範疇をNとし、それがNPを作るとすると、以下のように[+N]の要素がCをc統御している。



よって、このときCのタイプは[-end, +T]ということになる。そして、ガノ交替の対象となる名詞句はC[-end]にc統御されることになり、ガノ交替の成立条件を満たす。したがって、上記のガノ交替は成立する。

続いて、以下のような例を分析する。

- (21) a. [太郎 {が/の} 来た]ことが皆を驚かせた。  
 b. [太郎 {が/の} 帰った]のが許せない。

上記の例における従属要素は実質的な意味が薄く、一般に形式名詞と呼ばれる。これらは自立語で活用が無いうえに、上記の例のように助詞を伴って主語になることができるため、「こと」「の」は[+N]である。このとき、先程の例と同様に[+N]の要素がCをc統御していることになり、Cのタイプは[-end, +T]である。そして、ガノ交替が生じる名詞句はこのCにc統御されており、やはり先程の例と同様にガノ交替が成立する。

今までの従属要素は全て(12a)を満たす場合であったが、従属要素の中には、(12a)を満たさないものも存在する。

- (22) ジョンは[雨 {が/の} 止む]までオフィスにいた。

(Hiraiwa 2001:77(23)、原文英字)

- (23) [君 {が/の} 好きな]だけ食べていいよ。

(三原・平岩 2006:320(34))

本稿ではこうした例についてガノ交替が可能であるとしているが、実際にはノ格主語

の場合に文法性の揺れが生じると考えられる。上記の例における従属要素「まで」「だけ」は活用が無く、付属語で主語にならないため、(12a)の条件を満たさない。よって、(12b)の条件を確認する必要がある。まず、「まで」について、形容動詞に接続する際「な」は介在するが「である」は介在しないことがわかる。

(24) 太郎は見事 {な/\*である} までに以前と同じミスを繰り返した。

「だけ」についても、「\*好きであるだけ」は不可能である。そのため、「まで」「だけ」は本稿において[+N]である。これらの例は、先程の「本」「こと」のような要素とは明らかに性質が異なり、典型的な名詞とは言い難い要素である。しかし、本稿における[+N]の定義に当てはまると考えれば、[+N]の要素がCをc統御していることになり、Cのタイプは[-end, +T]である。したがって、3節で仮定したガノ交替の成立条件に該当し、定義上はガノ交替が成立すると言える。

#### 4-2 C[-end, -T]の場合

本節ではCのタイプが[-end, -T]の場合について、(14)で定めた「ガノ交替の成立における制約」に違反しない例と違反する例に分けて論じる。

まず、「制約に違反しない例」について分析する。

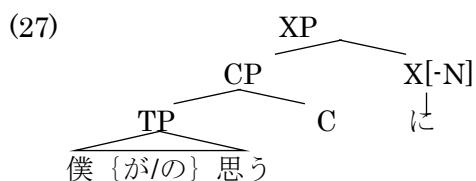
(25) [僕 {が/の} 思う]にジョンはメアリーが好きに違いない。

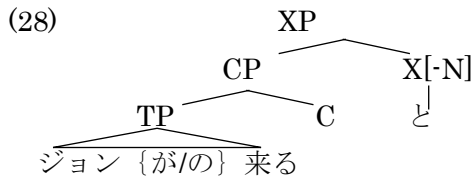
(Hiraiwa 2001:77-78(24)、原文英字)

(26) [ジョン {が/の} 来る]と来ないとでは大違いだ。

(Hiraiwa 2001:78(28)、原文英字)

それぞれの従属節における従属要素は、「に」「と」である。これらは明らかに自立語ではなく、形容動詞に接続する際は「\*綺麗なに」「\*綺麗など」のように「な」が介在しない。よって、「に」「と」は[-N]である。このとき、[-N]である要素の範疇を仮にXとし、それが作る句をXPとすると、以下の樹形図のように[-N]の要素がCをc統御している。





このとき、Cのタイプは[-end, -T]である。したがって、3節で仮定したガノ交替の成立条件に該当するため、上記のガノ交替は成立する。

次のような例も同様である。

- (29) a. [気 {が/の} 狂った]ようにゲームに夢中になる。  
 b. [地震 {が/の} 起こる]たびに防災の重要性が再認識される。

これらの例において、各従属要素から助詞「に」を除いた部分「よう」「たび」は一見 [+N]のように見える。しかし、いずれも助詞を伴って主語にならず、「よう」は形容動詞に接続した際に「である」が介在しうる。「たび」は、本来物事の性質を表す形容動詞と相性が悪く、形容動詞と接続できない。よって、これらの要素は[-N]であり、[-N]の要素がCをc統御していることになる。したがって、Cのタイプは[-end, -T]となり、ガノ交替の成立条件に該当するため上記の例のガノ交替は成立する。

次に、以下のような例を分析する。

- (30) この辺りは[日 {が/の} 暮れる]につれ(て)冷えこんでくる。

(Hiraiwa 2001:78(26)、原文英字)

- (31) ジョンは[時 {が/の} 経つ]とともにメアリーのことを忘れていった。

(Hiraiwa 2001:78(27)、原文英字)

上記の例について、従属要素「につれ(て)」「とともに」は、次のように名詞に接続するのが本来の用法である。

- (32) a. この辺りは時間の経過につれ(て)冷えこんでくる。  
 b. ジョンは時間の経過とともにメアリーのことを忘れていった。

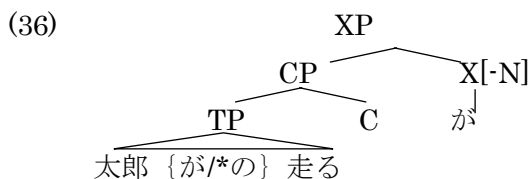
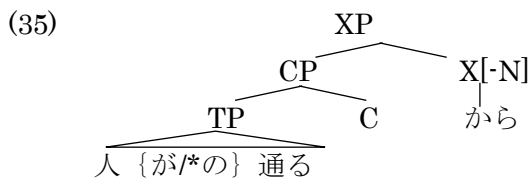
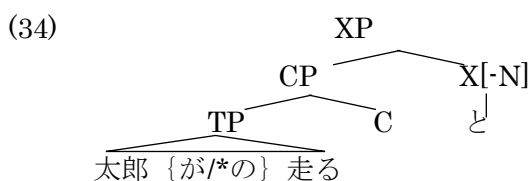
そのため、「本来名詞を用いるべき部分に節を用いているからにはガ格を用いるのが自然であり、ノ格の使用は不適切である」と考える話者が存在しうる。このことから、(30-31)の例におけるノ格の使用については、文法性の揺れが生じる可能性がある。本稿では、こうした例についてもガノ交替の成立条件を満たすものとする。

続いて、「制約に違反する例」について分析する。



- (33) a. [太郎 {が/\*の} 走る]と、次郎も走る。  
 b. [人 {が/\*の} 通る]から、道を空けておきなさい。  
 c. [太郎 {が/\*の} 走る]が、次郎は走らない。

上記の例の従属要素は、日本語記述文法研究会(2008)において「条件節」とされている従属節で、「と」は「順接条件節」、「が」は「逆接条件節」に分類されている。<sup>2</sup> これらの従属節における従属要素は全て付属語であり、形容動詞に接続した場合も「な」を介在させることができないため、これらの従属要素は全て[-N]である。このとき「と」「が」の範疇をXとすると、以下のように[-N]の従属要素がCをc統御している。



C[-end]がノ格主語をc統御しているため、統語上はガノ交替が成立するはずであるが、実際には成立しない。その理由は、これらの節が「条件節」であることに原因がある。大島(2010:79)は、従属節の述語が主節の述語にかかることが明示されていて、主節との主従関係が明確である場合はガノ交替が起こらないと述べている。「条件節」は主節との論理関係を示すことが目的であり、「従属節であることが前提となっている」のである。よって、ガノ交替の成立における制約に違反し、ガノ交替が成立しない。

三原・平岩(2006)で指摘されているように、「原因・理由節」の「ので」、「逆接条件節」の「のに」の場合もガノ交替が起こらない。

- (37) a. 太郎は[電車 {が/\*の} 遅れていた]ので授業に遅刻した。

<sup>2</sup> 以下、節の分類における名称は日本語記述文法研究会(2008)に準ずる。

- b. 太郎は[電車 {が/\*の} 遅れていた]のに授業に遅刻しなかった。

「の」は4.1節で[+N]としていたため、ガノ交替が成立するよう見えるが、実際には不可能である。ここで、「の」が直後の助詞と結合して文法化し、[+N]の性質を失い[-N]になっていると考える。すると、「ので」「のに」も[-N]であるということになり、[-N]の従属要素がCをc統御しているため、Cのタイプは[-end, -T]となる。すでに確認したようにこれらの例ではガノ交替が成立せず、その原因は先程の例と同様である。

更に、以下のような従属節においてガノ交替が成立しない理由も、本稿で定めた制約によって説明できる。

- (38) a. [雪 {が/\*の} 降った]にしては、外が暖かすぎる。

- b. [太郎 {が/\*の} 行く]なり、[次郎 {が/\*の} 行く]なり、好きにしてくれ。

「にしては」の「に」は[-N]である。「なり」は「並列節」を作っていて、[+N]の定義に明らかに該当しないため[-N]である。そして、今までの例と同様にガノ交替が起らない。

このことについて、(38a)は「逆接条件節」としての役割を果たしている例として解釈可能である。(38b)についても、「並列節」は二つ以上の節で構成されていることが保障されているため、「なり」に導かれる従属節は複数現れることが予測される。つまり、これらの節が主節でないことは明らかなのである。2節で述べたように、(38)でガノ交替が成立しない理由は、先行研究では説明できなかった。しかし、本稿の仮説によって、こうした例においてガノ交替が成立しない理由が説明可能となる。

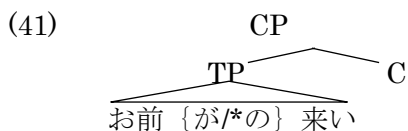
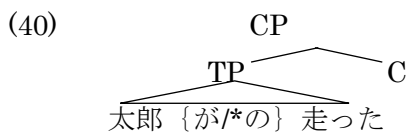
#### 4-3 C[+end]か、Cが欠けている場合

以下のように、主節の平叙文や命令文ではガノ交替が生じない。

- (39) a. 太郎 {が/\*の} 走った。

- b. お前 {が/\*の} 来い。

これらの例の構造は以下のとおりである。



上記の例において、Cをc統御している要素は存在しないため、Cのタイプは[+end]である。このとき対象の名詞句はC[+end]にc統御されているため、ガノ交替の成立条件を満たさず、ノ格主語は非文法的となる。

疑問文や引用節の場合も、ガノ交替が成立しない。

(42) 太郎 {が/\*の} 来ましたか？

(43) 太郎は[昨日次郎 {が/\*の} 来た]と思った。

(Harada 1971:27-28(9-10)、原文英字、括弧は筆者による)

「か」は終助詞であるため、それが付加している述語は[-end]になりえない。そして、引用節における「と」については、南(1993)の従属節の分類で最も従属度が低いD類に該当するため、従属節でありながらほとんど主節と同様の性質を持っているのである。これらのことから、Cのタイプは[+end]であるといえる。そして、対象の名詞句はC[-end]にc統御されていないため、ガノ交替の成立条件を満たさない。

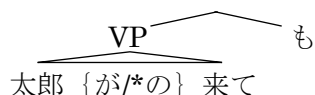
続いて、Cが欠けている節に従属要素が接続している場合もガノ交替が生じないことを確認する。次のような例では、ガノ交替が生じない。

(44) a. [太郎 {が/\*の} 来て]も楽しくない。

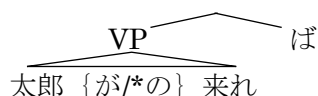
b. [次郎 {が/\*の} 来れ]ばきっと楽しい。

慣例に従うと、「来る」「来た」のような述語における「ル/タ」の活用部分は時制を担う範疇Tに生じ、Cはその上位に生じるとされる。そして、上記の例では「ル/タ」の活用部分が欠けており、それに伴いCも欠けていると考えられる。よって、次のような構造になっていると考えられる。以下、「も」「ば」の範疇は議論に無関係であるため省略して示す。

(45)



(46)



これらの例では、対象の名詞句がC[-end]にc統御されていないと言える。よって、ガノ交替の成立条件は満たさず、ガノ交替が生じない。

## 5. まとめ

本稿では、ガノ交替現象が成立する条件について、補文標識 C という観点から分析した。まず、C は C[+end]・C[-end, +T]・C[-end, -T]に分類されるとし、ガノ交替は対象の名詞句が C[-end]に c 統御される場合に成立するとした。そして、C[-end, -T]の場合についてのみ制約を設けた。結果として、本稿の仮説によってガノ交替が生じる文法環境を正しく導くことができた。

名詞主要部が必要であるとする Harada(1971)や Miyagawa(1993)、大島(2010)などの先行研究は、「に」「とともに」のような従属要素を持つ節においてガノ交替が成立する条件を説明できなかった。C[-end]が関わっていると分析すれば、ガノ交替が生じうる節をより広く定義でき、上記の問題は解決できる。一方、名詞主要部は不要であるとしている Watanabe(1996)や Hiraiwa(2001, 2005)といった先行研究にも、それぞれ問題があった。本稿の分析に Wh 移動は無関係であるため、Watanabe(1996)のようにノ格主語の成立条件が過剰に一般化されることはない。そして、Hiraiwa(2001, 2005)でガノ交替の非文法性が説明できなかった例についても、対象の名詞句を C[-end, -T]が c 統御している場合にのみ制約が生じるとすることで、適切な説明を与えることができる。

## 参考文献

- 大島資生 (2010) 『日本語名詞修飾節の構造』 ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』 くろしお出版
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造—ミニマリストプログラムとその応用—』 松柏社
- 山橋幸子 (2000) 「「ガノ交替」再考—文レベルからの考察—」『札幌大学総合論叢』 10, pp.15-27.
- Harada, Shin-ichi. (1971) “Ga-No Conversion and Ideolectal Variations in Japanese.” *Gengo kenkyu* 60, pp. 25-38.
- Hiraiwa, Ken. (2001) “On Nominative-Genitive Conversion.” *A Few from Building E39*, pp.66-124, MITWPL, Cambridge, MA.
- Hiraiwa, Ken.(2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*. Ph.D Dissertation, MIT.
- Miyagawa, Shigeru. (1993) “Case-checking and Minimal Link Condition.” *Papers on Case and Agreement* 2, pp.213-254, MITWPL, Cambridge, MA.
- Reinhart, Tanya. (1976) *The Syntactic Domain of Anaphor*. Ph.D Dissertation, MIT.
- Watanabe, Akira. (1996) “Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective.” *Journal of East Asian Linguistics* 5, pp.373-410.

(埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程)